

## 生活科についての一考察

川 尻 伸 也

### A Consideration of Life Environment Studies

Shinya KAWASHIRI

はじめに

新指導要領の総則，教育課程編成の一般方針 1 には「各学校においては，法令及びこの章以下に示すところに従い，児童の人間として調和のとれた育成を目指し，地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して適切な教育課程を編成するものとする。」と述べている。このことから本来は学校単位の教育課程が編成されなければならないが，小規模校であるため全教科を編成するのは無理であるとか，学校は違っていても地域の実態は似ているとか或は市町村内の教育内容の水準を保つとかのいろいろな理由で市町村単位で編成されたり郡の教育研究会が中心になって編成されたりしているようである。

ところが，生活科の年間指導計画作成は参考にする従来の計画もなく，しかも教師自身経験したことのない教科内容だけに，各学校が対応に苦慮していることがうかがえる。来年度 1，2 年生を担当する教師にとっては「生活科はこれでよいのか」と自問しながらの授業展開が続くことであろう。

それは，ある研究校の授業を参観して自分なりにとらえた生活科が，他の研究校の授業を参観してまた変わる。というように大きく揺れている事から想像できる。

生活科は教師の取り組む意欲や資質によって大きな差がでるであろうといわれている。そこで生活科における教師の資質を中心にして考えを述べたい。

#### 1. 遊び道具を作って遊ぶ活動に現れた子どもと大人の相違点と類似点

紙を切ったり貼ったりして飾りや遊び道具を作る活動は，家庭や幼稚園でも経験する初歩的なものから大人まで継続する工作技能であり，内容も豊富で楽しいものが工夫できるものである。筆者は小学校の 1，2 年生の子どもたちと教育学部 2 年次生と 4 年次生及び幼稚園，小学校の教師，子どもの母親等と同じ遊び道具を作らせる機会を得た。この遊び道具を作って遊ぶ一連の活動の中で興味ある行動を見いだした。(資料 1) このことについて考察を加えることによって，平成 4 年度から実施の生活科の取り組みに対処する教師のあり方が見いだせると考えた。

## 資料 1

## 1. 紙のこまを作ろう

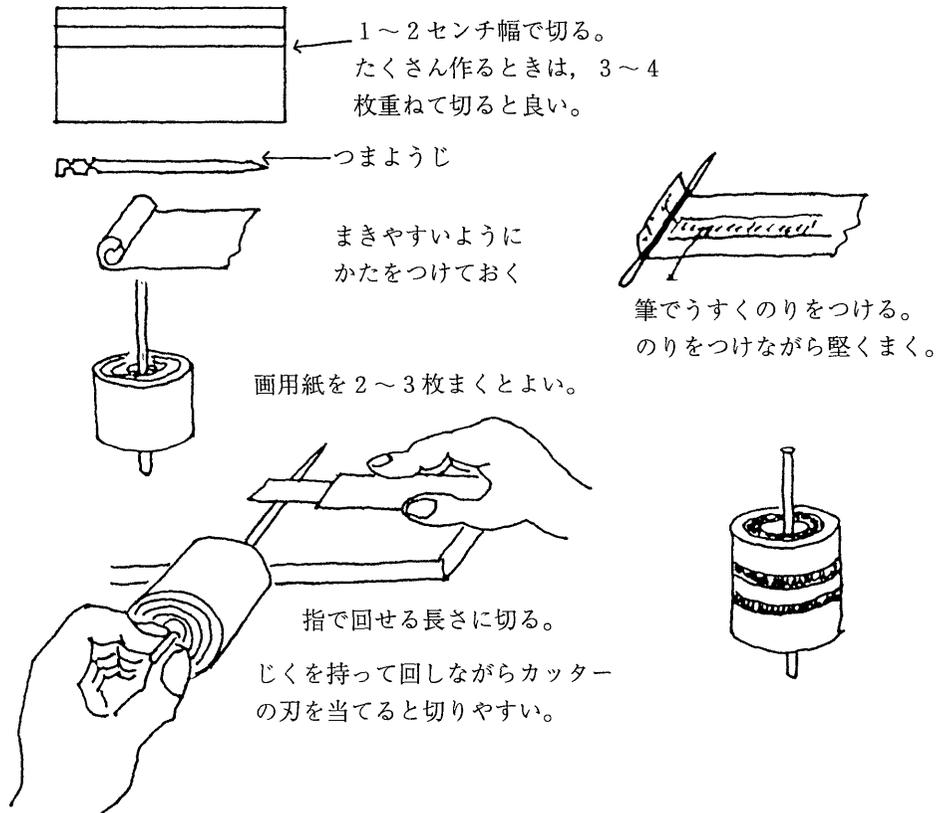
## 2. 対象 幼稚園から小学3, 4年生

## 3. ねらい 必要な量の糊の付け方, 固定の仕方, きれいな色の組合せ

## 4. 用意するもの

画用紙 (白い4ツ切りがよい), つまようじ, 50センチものさし, 筆木工用ボンド, 油性のペン, カッター板

## 5. 作り方



## 6. 遊び方

平らな面で回して遊ぶ。皿の中で回しても面白い  
 どれがよく回るか  
 色はどれがきれいか  
 左右の指で回せるか

観点別にみた相違点と類似点

表 1

観 点	子 ども	大 人
1 作業段階	教え合ったり助け合ったりしながら作る。	一人で黙々と作る。
2 出来ばえ	作るときの注意をうまく聞き取れなかった子のは糊付けがまずく大きく膨らんでいる。	子どもと同じ傾向がみられる重心が高いもの、つまようじの接地面が逆なものが目だつ。
3 回り方	うまく巻けたと自認する子どもの物はよく回る。	子どもの物と回り方には差はない。うまく回るものとそうでないものの違いが分かる。
4 回し方	きき手の親指と人差指で右回しの者がほとんどであるが左回しの者も見られる。はじめは回せない者もいる。	子どもと同じ傾向であるが、指の力のいれ方がうまくいかず回せない者もいる。
5 色付け	同心円に鮮やかな色をつける者と放射状に付ける者がある。 横の曲面には同じ色の細い線を一周させる子や漫画のキャラクターや好きな乗り物の絵を書くものもいる。軸にも色を付ける子がいる。	子どもと同じ傾向が見られる。横の曲面も同じ傾向がみられる。パノラマ式の絵をかき込む者もいる。
6 作り替え	作り替えを頻繁に行う。 新たに幾つも作ろうとする。	作り替えより新たに作る。それも2個が限度である。
7 道具の要望	色付けのためのカラーペンを貸して欲しい。余った材料を分けて欲しい等の要望が全員から出る。	特別に要望はない。色付けは自分のボールペンやペンで間に合わせようとする。

遊び道具として作らせたのは、前頁の紙のこまである。これは教師の基本技能修得のためと生活科教材として開発したものである。材料はつまようじと紙があればよく、どこの家庭にもあり、誰でも取り組める簡単なものである。しかも作り直しや新たに作るにも時間はかからないという要素も含んでいる。しかし紙の巻き方（糊の付け方）と重心によって回るものと回らないものが出来上がる。前述の対象者に同じ材料を与え口頭で同じ説明をして作らせた。その結果の概略は表1のとおりである。この表をもとに観点別に検討し、さらに考察を加えてみたい。

## 2. 子どもと大人の観点別特徴

### 観点1 作業段階

活動の違いは授業形態の違いからくるものと考えられる。子どもたちの学習形態は40名程度の集団で一つの課題に向かってそれぞれの個性的な考えをも出し合いながら一つの方向へ収束する事が多い。これに対して大学生の講義や大人の講演会の形態は、一方的に話したことを受け取るだけの受動的な方法である。能率や経済性を考えたところの集団を対象にした学習方法でありながら、前者は一人ひとりの考えを大事にする個別化の原理や集団の中での学び方を身につける社会化の原理を満たしながらの授業である。

後者は抽象的な言葉による理解ができるということからと能率的な面から一方的にならざるをえず、その学習形態が高校ぐらいから定着しているのでひとりで解決していこうという姿勢が強いことと、簡単につくりであることから共同作業をする必要を感じていない。

### 観点2 出来ばえ

大人は参考に提示されたこまを見て簡単であることから、すぐに作業にかかってしまい、つまようじの尖った部分を接地面にしたり、つまようじの中央部分に紙を巻き付け重心が高すぎて回りにくいものになったりしているものが見られた。

回り方から見ると差はないが、大人は回らないわけが分かりもう1個作る時は同じものは作っていない。子どもは理由はよく分からないが友だちのよく回る作りを見てまねたり作り方を教えてもらったりして作っている。

### 観点4 回し方

右手で左回しという子どもは、今までにこまのような心棒のあるものを回した経験がない子が多い。上手な子どもの手ほどきを受けながら、右手右回しをマスターして教えた子どもと変わらないぐらいになる。それに比べて大人で回せないものは自分の作ったこまがよく回らないものと思っているものが多い。筆者が回してみても自分の回し方による事に気付く練習して回せるようになる。この例は女子学生に多くみられる。

これから考えるとその年齢まで指の機能の中で使われていないものがあったということになる。しかも子どもと大人の回せないものを比べると子どもの方が早く回し方を覚えることができる。これは体の各部の機能を引き出すには適機があることをうかがわせる。

### 観点5 色付け

大人と子どもが同じ様なことをするのに驚かされる。民芸品として売られているこまは回転したときの色の美しさを見せるために工夫されている。中でも平べったい皿状のものは同心円の鮮やかな色が使われている。縦長のものは横に配色されている。子どものおもちゃにもあることからこれまでに目に触れる機会があったものと思われるが、意外にも上の面に大人も放射状に色付けをしたのである。また横の曲面にパノラマの絵をかいた大人は回転したら続いた絵として見られると考えたということであった。

回転したら色が混ざり合って汚い色になる事が分かった子どもはすぐに修正にかかった。上の面は白い紙を丸く切り心棒を通して色を同心円状に塗り変えた。横は同じく白い紙を貼り色を塗って作り替えた。それに比べ大人は次に作る時には失敗しないようにしようという考えだけで作り替えることまでするものは少なかった。つまり大人には子どものような、こまで遊ぶという意欲はないようである。

考察1 重心が高かったり、つまようじの尖った部分を接地面にしたりしたため回らないこまになった大人の活動について考察してみたい。

身近にあるこまの仕組みが十分に分かっていないことがうかがえる。教師として生活科の学習を進めるとき小さいときの遊びの経験やその他の生活経験が乏しいと指導する内容も乏しいものになりはしないだろうか。

教師の生活科に対する不安を払拭するために「生活科では教師は準備も何もしない方がよい。子どもに活動の場を提供すればよい。」という主張もある。

また一方では国語や算数などの従来の教科とは違った教師の資質が問われる教科である、ともいわれる。

いずれにしても教師は子どもの活動を予想し、事前の準備をすることは従来の教科と同じでなければならないのではないだろうか。さもないと子どもが活動しながらいろいろな要望を出して来てもそれに対応できないことになる。

考察2 子どもと大人のこま作りの共通点は共に最低2個は作ろうとすることである。これは交互に回してどちらがよく回るか比べてみるという本来の「独楽」の「独りで楽しむ」ことが潜在的な考えとしてあり、それが行動として現れたものであろう。

子ども大人ともに自分の2個の回る時間比べを始める。これらから後の行動は子どもと大人で大きく違って来る。子どもは2個のうちよく回る方を決めた後、近くの友だちとどちらが長い時間回るか競争を始める。やがて競争の輪がだんだんと広がっていくが判定が難しくなる。すると4～5名ずつが一つのグループを作りその順位を決める。それぞれの1位が集まり順位を決める。このグループの1位がグランドチャンピオンということになる。これは子どもにとっては非常に名誉なことであり、こまは宝物と化すのである。2位以下も同様である。こまがもつひとり遊びの要素から競争の要素がもつ遊びへと発展し、子どもの活動が活発になったと考えられる。

子どもがこのように盛り上がった雰囲気では教師は何をなすべきか。生活科の活動の連続を考えるとこのままで終わるのはもったいないものである。子どもの活動を予想できるなら賞状や金メダルを作っておくこともできる。

金色の箱（長崎物語の菓子箱等）を円切りカッターで切抜き中央に賞のシールを貼り首

に付ける毛糸を付け、裏に名前を書き込むだけである。同様に銀メダル、銅メダルも作ることができる。表彰式も子どもに任せることができる。

よく回るかどうかはこまの善し悪し以外に回し方にあることに気付きはじめると、自分の最も回しやすい方法を見つけようといろいろ試みる。チャンピオンに挑戦して勝ったりする子が増えてくると自信を深め再度こま回し大会を要求してくる。このようにして遊びは継続される。自分を振り返るときにこま作りやこま回しが上手になったこと等もよい成長の記録になる。

大人には「子どもになったつもりで子どもがやりそうな事をやってみてください」といってもグループのチャンピオンを決めたり、グランドチャンピオンを決めたりとかの活動がみられない。このことは教師として子どもの活動を予想することができないことになるばかりでなく、子どもの活動を盛り上げる教師の手だても考えられないことになる。

子どもが遊びに没頭しているときは、次から次へと活動が広がり、教材が内包する価値によって学習のねらいに到達することから「生活科は子どもに活動を任せたがいい」ということがいえるのかもしれない。下手に手出しをして活動を中断させたり阻害したりするよりも、むしろ何もしない方がよいという考えがあつての事だろう。それはそれで否定はできないし、場合によってはそのことが重要なときもあると思われる。しかしそのことが生活科全般にわたって「生活科は子どもに活動を任せたがいい」ということにはつながらない。

生活科では教師は子どもを指導できるだけの十分な技能を身につけ、子どもの活動を予想し、そのための準備をしておいた上で学習中は「子どもに活動を任せる」ということにしないと子どもの多様な活動に対応できないことになる。

こういう意味で生活科は教師の意欲や資質に負うところが大きいと思うのである。

ここで改めて生活科を指導する上での教師の意欲や資質というものを考えてみたい。

### 3. 生活科における教師の資質

#### ① 子どもの日常生活の良き理解者であること

生活科は活動そのものが学習である事を考えると、学習の結果が日常の生活に生かされたり、日常の生活の仕方を学習に取り上げたりということが行われる事になる。したがって全ての子どもにピグマリオン効果を期待して見守ることが必要だろうと思う。「この子はいい子だ伸びるだろう」と期待をかけ、指導を積み重ねて行くと、期待どおりの子どもに成長することがある。この逆もあり、初めから「この子は困った子だ」という先入観で子どもを見てみると、その子のよい行いも見えなくなり、ちょっとした悪い行いも厳しく叱るという事になってしまう。良いと期待した子が同じ事をした場合にはほめられ、悪い行いは見逃す。このようなことは教師が意識しないまま行っている場合が多く、学級の子どもたちと一緒にスケープゴートを作っていることになる。これは絶体にあつてはならないことである。特に生活科では活発な活動をする子が時には他の子どもの世話までやきすぎて迷惑がられることもあるが、それ以上に困った子や消極的な子に対して手を差しのべていることも見逃してはならない。

子どもを見つめる目は公平・公正でなければならず、そのため子どもへの接し方は「愛」ではなく「関心」でなければならない。これは理念としては分かっているが実践となるとなかなか難しい。それ故に繰り返し叫ばれることである。

一つの方法として生活科を中心とした観察記録をとってみることである。気付いたことをメモするという立場で記録していくと活発な子の記録が多くなり、そうでない子の記録が少ない。極端な場合は白紙のままということがある筈である。

活発な子の記録は望ましい行動の子とそうでない子、という冷たい評定を目的にした見方だけでとどめないで教師や友だちとの関わりの中で望ましい方向へ向けてやる必要があるであろう。また白紙の子は大人しい目だたない子ではなく教師の関心が向いていない子ととらえ、教師が授業や遊びの中で関わりながら見ていくことが必要であろう。

いずれにしろ、否定的な見方からはよい結果は生まれてこない。特に行動様式が固定していない低学年においては否定的な見方は厳に慎まなくてはならない。

生活科が楽しいというようにするには、子どもの日常生活を尖った目でなく柔らかい理解のある目で見つめることが不可欠であろう。

## ② 地域を理解し愛する教師

生活科は子どもの生活圏である学校、家庭、地域が学習の場であるとされている。それ故に学校を中心にした地域の自然や社会事象を盛り込んだ生活科マップや事前の準備や作業等を位置づけた生活科暦やその他の資料も備えられている。その地域にも初めてという教師でも生活科の授業を担当することができるようになっていると思うが、だからといって事前の下調べもしないということは許されないことである。交通の便が良くなり校区外からの通勤が多くなるにつれて、地域とのふれ合いが薄れてきた。

以前はその地域に住み地域の人々との交流が十分にあったが、今は離島や交通の便の悪いところをのぞき、学校と校区外の自宅を行き来するというようになってしまった。このような状態で地域のもつ教育力を借りようとしても表面的なものに終わってしまう恐れがある。

地域を理解するためには、自分の足や目で確かめてみることである。そこには地域が受け継いだ知恵があり、生活科に組み入れられる自然があるはずである。学校周辺の自然、例えば田畑、山林、竹林、川、海岸、お寺、神社、公園、商店（街）、等の様子を自分の足で確認したり、これらに関わりのある人との交流は一層緊密な関係を保っていく必要がある。

## ③ 総合学習を支える技能をもつ教師

指導要領第4 指導計画の作成に当たって配慮すべき事項の中には次のような事が記されている。「各教科の指導に当たっては、体験的な活動を重視すると共に児童の興味や関心を生かし云々」とあるように、学年に応じた活動を取り入れることを述べている。体験的な活動はひとり低学年の学習方法だけでなく、学年に応じて取り入れるとより具体的な理解が得られることはいうまでもない。

この体験的な活動を取り入れるためには、いろいろな技能が必要であるが、特に飼育や栽培に関する技能をもつ教師であることが望ましい。

学校での飼育動物の主なものは、鳥類ではジュウシマツ、インコ、ベニスズメ、ブンチョウ、ニワトリ（チャボ）等であり、哺乳類ではウサギ、モルモット等、その他カメ、ザリガニ、コイ、キンギョ、フナ等である。

学校での動物飼育を困難にする理由は餌の確保が難しいことである。市販された餌だけで飼育できるものは割と簡単だが、毎日新しい餌を補給してやる様なウサギ、モルモット、ニワトリ等の世話は大変である。学校周辺の野草の中で食草になるものがあるかどうか、また学校の近くに野菜屋があるかどうかによってもずいぶん違ってくる。

学校周辺にクズがあれば3月から11月位まではウサギやモルモットの餌の確保ができる。餌の不足する冬の期間をラビットフードと野菜くずで育てることができる。高学年の飼育委員会の子どもが育てている飼育舎の中のものに、餌を与えるだけでは自分たちで育てたという意識は湧かないようである。やはり自分たちの教室に持ち込み餌やりから糞尿の世話などをして初めて実感するようである。その点から考えるとウサギやニワトリよりもモルモットの方が都合がいいようである。

いくつかの長所を挙げればウサギに比べて体が小さく餌の量が少なくすむこと、果物の皮から野菜くずまで食べることで、餌を求めて泣くこと、性質が大人しく抱いても暴れないこと、生まれたときに毛がはえていてすぐ走り回ること、子育てがうまく乳を与えているところが見られること等である。

動物を飼ったり、植物を育てたりする活動を通して自分たちと同じように生命をもっていることや成長をしていることに気づかせ、それらを大切にすることができるようにするには、誤って死なせたり、枯らしたりすることは避けさせたい。

動物が快適な状態で成長するように工夫し、植物は立派な花や実をつけるような指導ができる技能を身につけた教師であることが望まれる。

#### ④ 日常生活で頻繁に使われる簡単な技術を完全に修得している教師

前述のこま作りの基本技能の一つは糊を必要量をつけて接着することであるが、子どもも大人も必要以上になるのは糊付けの基本技能が身に付いていないためであろう。生活科は子どもの活動を補償するといっても、やりっぱなしにさせて良いというのではなく、基本的な技能はその都度しっかりと身につけさせておくことが必要であろう。糊の付け方もボンドの容器の口から出るものを一本引っ張り、それをつまようじかへらまたは筆で薄く延ばしていく事などはその時に指導しておけばそれ以降は生きて働く技能となる事は確かである。これらの技能は教師が経験し身につけておき必要に応じて指導することである。

糊付けに限らず、身の回りの素材の性質を知りそれを加工する簡単な技術、例えば紙工作、木工作、竹工作、金工作、新素材等を身につけていれば生活科に限らず他の教科の教材開発にも役に立つことになる。

#### ⑤ 個人の生活経験を常に広げようとする教師

学校のためだけに生活経験を広げようとしても億劫になってしまうが個人の趣味や楽しみとして経験することはそれほど苦にはならない。例えば1、2年生の子どもがいる教師は自分の子どもと一緒に紙を使った遊び道具を作ってみるのもいいだろう。親子のふれ合いをもちながら子どもの興味・関心、それにかかる時間、難しいところ等も分かってくる。

そのことから教師がどこまで準備しておくべきか、その学年に適した教材であるかどうかも分かる。

休日には日曜大工をやってみるのもいいことである。これは親子でも夫婦でも楽しめる。簡単なものから始めてだんだんと腕が上がり、もっと能率的にきれいに仕上げたいということで電気工具などが欲しくなる。こうなると家庭ばかりでなく手作りの教材が増えはじめ、やがて教室での飼育するためのモルモットの小屋なども作れるようになる。

学校には一般備品か図工の備品として大抵、電動工具が備えられている。また、その気で捜すとたくさんの木材やその他の材料も見つかる。焼却炉で燃やしていたものや廃棄処分されていたものの部品が教材に変わるのであるから学校にとっても子どもたちにとっても、また教師にとっても良いことになる。

地域にある女竹や真竹、孟宗竹等も目的によってそれぞれ利用することができ、自然の素材としては利用価値の高いものである。生活科で使うものとしては子ども一人ひとりにシャベルを作ってやることもできる。凧作りの時の骨も簡単にできる。総合学習まで広げると、鉢植えの支柱、竹トンボ、学年に適した凧作りなどたくさんの物が計画できる。

こう考えて来ると教師が日常生活経験を広げ趣味を多くもつことは、教師の資質を高めることに大きく関わっているといえる。

## ⑥ 協調性のある教師

新任の教師や転勤してきた教師などその地域が初めてのとき、その地域のことを調べながら授業を進めていくということは、地域を知る上で大切なことではある。しかし、子どもにとっては停滞になる場合がある。こんなことにならないためにも教師間の緊密な協力態勢が必要になってくる。ところが教師間には好ましくない競争意識が存在するようである。例えば、菊の一鉢栽培をしていて自分のクラスの鉢には水をかけても隣にあるほかのクラスの鉢にはかけてやらないとか、手洗い場の前の鉢物の花が水不足で枯れそうになっている、そのままにしてあるとかである。このようなことでは生活科で植物も自分たちと同じように生きているということを教えても何の意味ももたないことになってしまう。また、道徳で友情や協力を説いても、実践力のないものになってしまう。今や教育は学校だけでなく家庭や地域の教育力も十分に取り込み、積極的に利用しようとしているときに、教師間の協力態勢ができていないのでは、学校教育が十分に機能していくはずがない。

教師の協力体制は子どもを媒介にして作り上げていくのがよいと考える。例えば「今日はこの教材を使ってこのような発問をして進めたら、子どもたちが良く頑張りました。」とか「あの子が最近頑張っています。」とかの会話が職員室に満ちていたり、子どものよりよい変化を同学年の教師に報告したり、前の担任に報告したりすることからでもきっかけができる。教師の職業上の長所は、話題に上がった子どもを知っている教師は廊下でもその子に声をかけてくれることである。「頑張っているそうだね」という声が2～3人の

教師からかけられると承認された喜びを感じることができ、ますます奮起することになる。担任や専科だけで子どもの指導をするのではなく、お互いに子どもを育てるという意識で取り組むことが教師間の協力関係を作り出すことになる。

#### ⑦ 子どもとともに成長する教師

生活科は多様な活動を取り入れて学習を展開していく教科である。活動をしながらみんなで賢くなる教科である。これは子どもだけでなく教師も子どもと共に賢くなる教科にしなければならないと思うのである。

ところが、教室は大人の目を全く意識しないですむ閉ざされた空間であり、しかも学習内容は簡単である。たとえ、教材研究不足や準備不足があってもそれを指摘するものはない。また、教材研究も十分にやり適切な発問で子どもの活動も活発な学習が展開されたとしても、それを賞賛するものもない。

このような中で常に前向きなよい授業を目指して取り組むためにはかなり強い信念と強い意志が必要なようである。

こう考えると頭の上に何か重苦しいものが乗ったように感じるが、もっと気楽に考えて授業を楽しむ方向に変えてみたら良いと思うのである。それには次のような考えで取り組んでみてはどうであろうか。

子どもの活動を予想した学習計画で、しかも子どもの活動を十分に保障したものであれば、子どもの生き生きとした学習が展開されることは間違いない。

子どもの興味を誘い活発な活動をさせるには、教師自身が学習内容に没入し興味をもたなければならない。教師がこのような取り組みをしたときは子どもは学習に満足しているはずである。満足した様子は教師にはよく分かる。この子どもの満足した様子が教師の次の研究の原動力になると考える。つまり教師は子どもの活動が活発になり十分に理解したという実感がもてたとき、次の授業への意欲が出て来るものようである。この実感の積み重ねが教師の資質を高め、教材研究に駆り立てているのだと思うのである。従って子どもが学習に満足した授業を経験できない教師には新たな意欲が湧かないことになる。

#### 4. 教材の選定と開発

実際に生活科の単元をもとにして教材の選定について考えてみたい。「生き物を飼ってみよう。」という単元で川の生き物を捕まえて教室で飼うという計画を立てたとしてみよう。学年の3～4クラスの子どもたちが川に入り、フナ、テナガエビ、サワガニ、等を捕まえたとしてみよう。それでその川の種が極端に減ってしまったては教材として取り上げた意味がない。子どもが入って捕まえられる川は水深が浅く、川幅も小さい所が選定されるはずである。そこに一度にたくさん人間が入り、魚などを捕まえると生き物の回復力がなくなる恐れがある。次の年には捕まえることができなかったという場合があるかもしれない。

単元のねらいは、「生きものを飼って、それらが自分たちと同じように生きて成長していることが分かり、それらを大切にすることができるようにする」ことである。教室で飼

うことによって生きていることは分かっていても、運ぶ途中や飼っていて殺してしまっただけは、生き物を大切にするという態度を育てることは難しい。

死なないように上手に育て、一定期間飼育したら元の場所に返してやるとかの配慮がなければ大切にすることとはいえないのではないだろうか。

それでも地域の特性を生かし、しかも子どもが自然の中で生き生きと活動する内容であるから、よいという考えも成り立つ。しかし、生き物を取り扱うには守らなければならないいくつかの制約や注意が必要だと思うのである。生き物を学習の対象として取り扱う以上は、根底には生命尊重の態度と自然愛護の心をもたなくてはならない。教育の場で生き物の死に出会うことがあるがそれは手を尽くして育てた上での死でなくてはならないと思うのである。そうすればあれだけ可愛がったのだから、あんなに長生きしたのだからと諦めがつくと思うのである。生き物の死でこれだけ悲しい思いをするのだから、人間の死はもっともっと悲しいはずだと思うだろう。核家族化して祖父母の死に直面していない子どもが多くなり死の意味が分からなくなっているといわれるが、可愛がった生き物の死はその代理経験とすることができる。

地域の教材開発には、二つの見方ができるようである。一つは地域の自然や社会事象の中から生活科の教材として取り上げられるようなものがないかどうかを捜す方法である。もう一つは生活科の内容を念頭に置いて地域の自然や社会事象を見つめるという方法がある。

前者の例は海や川の近くの学校では海岸や川原の丸い石を使って教材化できないか考えることである。すると石に目や鼻を付けると面白い動物の顔ができあがる。(資料2)

後者の例としては、1年の内容(4)土や砂などで遊んだり云々というところを念頭において素材を捜してみることである。もし学校の近くに赤土の粘土がある場合には、そこに行くか学校の片隅に運んでもらって、水を適当に混ぜて、いろいろな形をつくってみることができる。砂茶碗や土茶碗を作ったり団子を作ったりするだけでなく、粘土ではいろいろな形のものを作ることができる。それを乾かして火で焼いてみると面白いものができる。土が堅くなって水にいれても壊れない素焼ができあがると、子どもは絵の具で着色する活動に取り組むはずである。そのうえにニスを塗ると素朴な古賀人形のようなものができる。上薬を付けて焼くのは高学年になってからであるが、小さいものは家庭用のコンロでも焼くことができる。(資料3)

事例 2年生 海岸や川原の石を使った教材開発  
1年生 土で作ったプレゼント

資料2

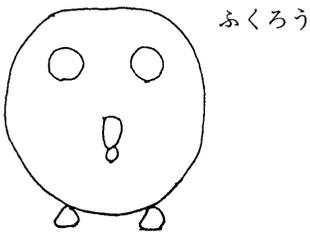
1. 石の動物, 人形

2. 対象 幼稚園~大人

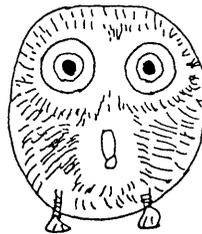
3. ねらい 自然物からイメージをふくらませる, 着色の仕方, ニスの塗り方

4. 用意するもの 海岸又は川原の石, 絵の具, 透明ニス

5. 作り方



ふくろう



絵の具で好みの着色をする

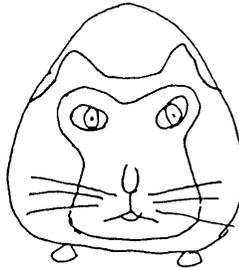
茶色, 焦げ茶色, 黒などで  
羽毛の感じを出す

木工用ボンドを丸くたらし,  
1日乾かす くちばし

石の安定が悪いときは, 小石を  
ボンドで付け立たせる



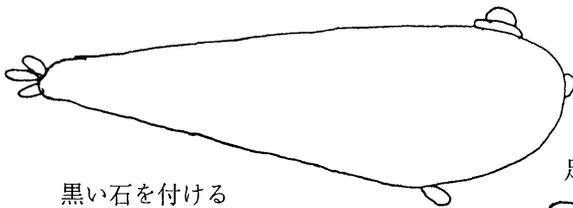
シヤムネコ



白

茶色

釣り用のテグス



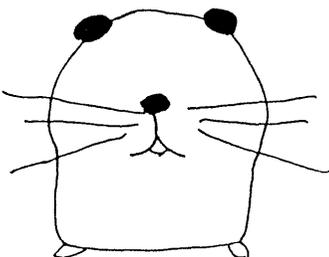
アザラシ 細長い石

目玉に小さい黒い石をつける

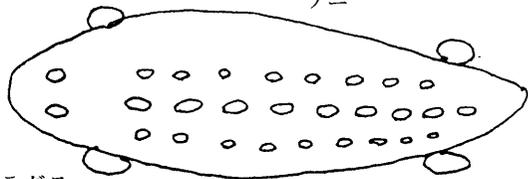
黒い石をつける

足を付ける

ワニ



釣り用のテグス



木工用ボンドを付けその上に  
小石をのせる。

絵の具が乾いたら, 透明ニスを2回塗る

資料3

1. 素焼の土鈴と可愛い動物

2. 対象 幼稚園から大人まで

3. ねらい 土を高温で焼くと堅くなり、水に入れてもくずれないことがわかる。部屋の飾りや役に立つものを作る

4. 用意するもの 信楽粘土（教材店で購入できる200円程度）

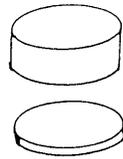
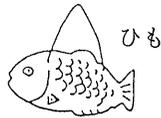
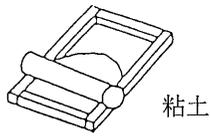
5. 作り方

幼稚園児や低学年の子どもには平面的なものを作らせる。

丸い棒で木枠の上を転がし  
厚さ1cm程度に延ばす

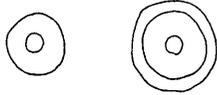
粘土ペラで形を切り取り  
ペンのキャップやつまようじでうろこをかく

お茶の缶蓋を押しつけて丸い型を切り取り皿を作ることができる



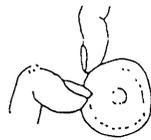
カエルの土鈴（中学年～大人）

粘土玉



ティッシュ

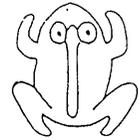
粘土



口の部分をあける



前後の足をひねり出す



目玉を作り水を付け取り付ける

紐を通す穴



目玉、鼻の穴をあける

ふぐの土鈴

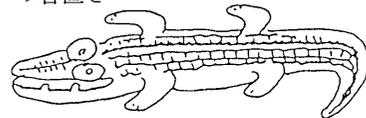


ムツゴロウの箸置き



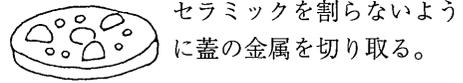
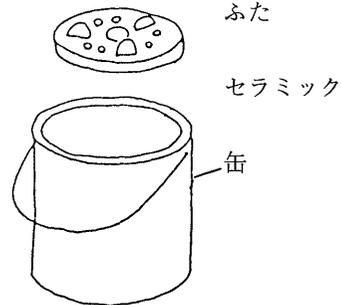
4つのひれをひねりだしすじを入れる  
目玉を取り付ける

ワニの箸置き

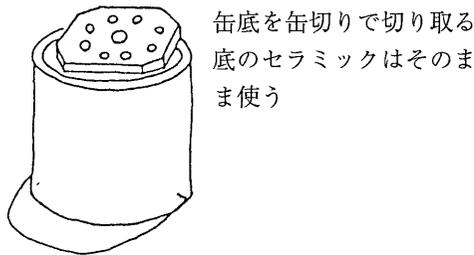


口の部分からつくり胴、手をひねり出す。つまようじで背中の中の凹凸やすじを入れる

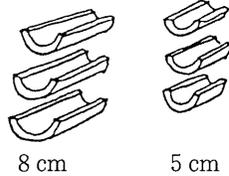
セラミック練炭コンロの内筒



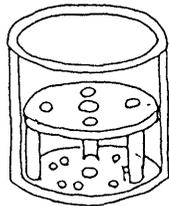
セラミック内筒の中に入るように外周をカッターで切り取り中棚を作る。



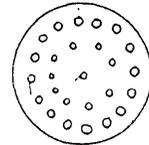
棚を支える脚を作る  
半円形かL字型



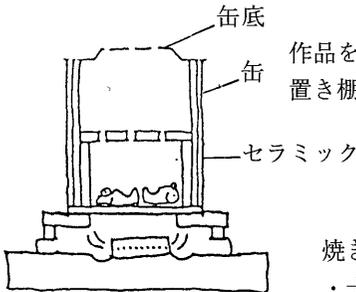
棚と脚を組み合わせたもの



作品を底に並べてから脚を置き棚を乗せる。  
棚 素焼は重ねて焼くことができる。  
脚 棚の中が真っ赤になっていれば火を消してよい。



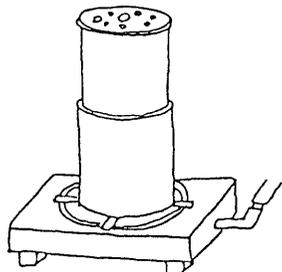
ごとくに乗せる底の部分を粘土で作ってもよい。5 mm位の厚さに延ばして半径8.5~9 cmの円を切り取り、コンロの火が入るところに小円を開ける (丸筒で)



作品を底に並べてから脚を置き棚を乗せる。

焼き方 (低温のゆう薬を購入する=楽焼用)

- ・十分に乾燥させてから素焼する。(自然乾燥1週間)
- ・ストーブの上に置いて乾燥させてもよい。
- ・素焼は最低の弱火で5分、強火で5分焼けば十分である。
- ・本焼きは絵の具とゆう薬を混ぜて塗ると手間が省ける。
- ・本焼きは作品が付かないように置き、強火で5分焼く。
- ・空かんを乗せるとさらに温度上昇が速い。
- ・台所で焼くときは換気扇を使う。(手をかざして温度に注意する)



## おわりに

生活科は文部省指定校や附属小学校で先導的に試行され、研究発表が行われてきた。その公開された授業を参観すると、これまでの座学から解放された活動的な学習でしかも教師からは指示、抑止、禁止等の言葉は聞かれず、危険防止等の注意がある程度である。

発問はもっぱら活動を促すもの、活動を賞賛するもの、活動を広げるものなどであり、これまでの授業とは趣を異にしていることが見て取れる。しかも、これまでの授業がそれぞれの考えを出しながら、一つの方向へ収束するものであったのに対し、オープンエンドであることに不安も感じる。しかし、これが生活科である。

子どもの立場に立って考えるとこれほど楽しい学習はなかったのである。集団の中のルールは守りながら自分の思うことができるのであるから楽しくないはずはない。そのような授業を指向して、実践を深めるのがこれからの課題である。そのためには、教師自身の意識改革を図り、「子どもの立場で学習を見直す。」ことが必要なのである。

## 参考文献

- |                           |                                |
|---------------------------|--------------------------------|
| 小学校指導官 生活科編 文部省           |                                |
| 生活科全単元・学習指導書 初等理科教育特集     | 日本初等理科教育研究会 1991<br>全国生活科教育研究会 |
| 水際の教育と生活科 大日本図書           | 長崎大学教育学部教科教育学研究会               |
| 教科教育学会第17回全国大会資料（生活科関連資料） |                                |
| 附属小学校研究紀要                 | 長崎大学教育学部附属小学校                  |
| 橘小学校研究紀要                  | 長崎市立橘小学校                       |
| 教材開発テキストNo. 3             | 川尻編集                           |